

「死んだら

ごめんなさい」



CLIENT
SPEAKING
クライアントの声

その人の発することばを受け止め、その意味はどういうことなのかを考えなければ専門的な介護はできない。医療的ケア（キュア）は当然、しかし、看取りは専門的な職業者としてのケアでなければならぬ。

「つふふ、まんだ、古びた電球を灯しとりますの」

（つるさん・95歳・平成23年）

「つるさん、気分どお？ 赤いほつたで良いお顔よ」

山吹の地に生を受け、育ち、幼馴染と結ばれ、共に農に精出し、山吹をこよなく愛し、誇りとする。夫が入院し、一人暮らしとなり、親族が力を尽くし、91歳にして初めて、故郷を出て麦の家に入居することになった。別れの日、夫はベッドに身を起し、無言のまま、認知症という病を得た妻のこうべを、大きな両手で包み込まれたと伺った。

ほどなくして、つるさんの居室にご主人の遺影がおかれた。「つるさん、ご主人が恋しいわねえ」と話すと、「い

ね、わたしは、もちつた、こつち

おるの」と赤いほつたを輝かせた。忘れることができる、忘れてはいないが、凜として、耐えることができる。この世で楽しもうとしている…

冒頭は逝去の10日ほど前の会話。

山吹で夫婦が全力で築いた、大きな張りのある薄暗い農家の空間に吊り下がった裸電球。「古びた電球」はとくに消えかかり、また、ポットまあるく灯る。その電球を「灯しとる」というコトバに示された生への主体的な意志は、また「生かされて在る」という天への応答でもある。一か月前、リクライニングチェアにのつたつるさんは、職員と共に山吹をたずね、暮っていた住職に別れを告げた。

「地域密着型」と「制度づけられた」グループホーム麦の家は、彼女にとつて、つくられた「ふるさと」になりえたであろうか？

「今晚、死ぬかもしれん、死んだらごめんなさい」

（貞夫さん・97歳・平成25年）

家族、診療所、麦の家、三者の話し合いで貞夫さんは麦の家で最期を迎えることとなった。共同棟で仲間と過ごす時間よりも、居室で過ごすことが多くなる。食事柔らかかなお粥などから、卵豆腐やゼリーへと少しずつ変わる。看護師が点滴にくる。小さな置机の上には、バイタルやワーカー同士の連絡事項などを記入するノートがおかれ、吸引機、在宅用酸素ボンベなどが整頓される。時々、職員と入居者が、そつと、お見舞いに訪ねてくる。数か月の間に、日常が、少しずつ、小さな変化をみせていく。

16時、夜勤者は日勤者から申し送りを受け、一人ひとりの居室を訪ねて「今晚はわたしが夜勤です。よろしくお願いします」と挨拶に行く。

冒頭は、勤務2年目の若い青年に向けて語られたコトバ。自己の生の終わりを意識し、その時を迎えようとしている人の思いとはどのようなであろうか。それでもなお、「他者」「隣人」である、夜勤を務める若者の不安な思いを想像し、寄り添おうとする。三日後に逝去された。

死にゆく者が生者のために心を寄せ、祈る。心を寄せられた介護者の

ケアは、どのように日々のケアに活かされていくであろうか。人は死の瞬間まで成熟すると言われる。

「南無阿弥陀仏」

（ゆきさん・93歳・平成28年）

6月26日、朝5時。最期の日々の床にある美知子さん（95歳）の容態が危ういと、夜勤者が知らせてくる。美知子さんの居室のベッドの傍にいと、5軒棟の端つこの居室の扉をドンドンとたたく音がする。向かうと、ゆきさんが外に出たいという。夜勤者は他の入居者のケアに入っているの、「私と病気のおばあちゃんのお見舞いに行つてちょうだい」と頼んで、一緒に美知子さんの居室に戻る。美知子さんの顔を見て手を合わせ、「南無阿弥陀仏」。

ワーカー…（小さな声で）おばあちゃん、まだ、ほら、見て、息してるでしょ？

ゆき…大丈夫？ ほんに、まだ生きとる。東京音頭歌つたら、まっかい顔して聞いてくれた。わたしもこういうふうになりたい。いい最後だなあ。人間同じ、こうして最期を迎えていく。外で死ぬ人もおる。運がよかった。

ワーカー…ゆきさん、おばあちゃんに何かお話ししてあげて。

ゆき…ご家族のみなさまのお心遣い